

Anne Gerritsen, *Jian Literati and  
the Local in Song-Yuan-Ming China*

小林 義 廣

名古屋大学東洋史研究報告 三五号 二〇一一年三月発行

宋代以後の中国史の展開に関心を寄せる研究者にとつて、江西は興味の尽きない地域の一つといえよう。江西は、スキナー (William Skinner) の、中国全土を大河川とそれが形成する流域に基づいて九つの大地域に分けた区分法に従えば、湖北・湖南両省とともに、都市化がほどほどに進んだ長江中流 (Middle Yangtze) 地域に一括して括られ、しかも江西は長江中流域を代表する四大支流のうち、九江市で長江と合流する贛江の流域に発達した地域だとい<sup>1</sup>う。

この地域は、唐宋五代時期になつて、とくに五代十国時代に南唐の領域になつて開発が進み、宋代になると、この地域を祖籍とする歐陽脩 (吉州)、王安石 (撫州)、曾鞏・曾布兄弟 (建昌軍)、黃庭堅 (洪州)、周必大 (吉州)、文天祥 (吉州) といった、歴史に名を留める多数の文人・政治家を輩出

した。また、宋代以後の、いわゆる新道教のうち、淨明忠孝道は六朝時期に江西北部の南昌に生を受けたといわれる許遜の伝承を軸に、この地域を中心として南宋時期に教団が形成された。<sup>2</sup> さらに、この地域は、儒学史上においても重要な位置を占めた。たとえば、宋代において撫州金溪県を拠点として活躍した陸九淵 (象山) は、思想的に朱熹と鋭く対立して、明代の陽明学にも繋がる「心即理」を唱えた。また、明代には王守仁 (王陽明) が当地の贛州に赴任して明代郷約の嚆矢ともいふべき「南贛郷約」を実施し、彼が当地を離れた後も、弟子たちがいわゆる江右学派を形成して陽明学の発揚に努めたりしたのである。<sup>3</sup> その他にも、江西は東南沿海部の福建や広東とともに宗族結合が強い地域として歴史上に有名である。<sup>4</sup>

本書は、こうした特色ある江西の中部に位置する吉州（明代以降は吉安）という地域を対象とする。そして、そこを出身地とする士人・士大夫 (literati) が自己の地域に対して、どのような所属意識 (identity/belonging) をもっていたのか、とりわけ寺・観・廟といった聖地の景観をめぐって、その所属意識はどう関わっていたのか、さらにはそれらの意識が歴史的にどう変化していったのかを、南宋が建国される一二世紀前半頃から一七世紀初頭の晩明に至るまでの数百年に亘る長い期間を視野に入れて考察した意欲作である。著者のアン・ゲリチェン (Anne Gerritsen) 氏は、本書の「謝辞 (acknowledgements)」及び現在の勤務先の英国フーウィック大学 (Warwick University) のホーム・ページによる「オランダのライデン大学 (Leiden University) で中国語と中国文化を学んで学士と修士を取得し、その後、米国のハーバード大学 (Harvard University) 大学院に進み、唐宋時代の思想と文化の研究で著名なピーター・ボル (Peter K. Bol) 教授に師事して二〇〇一年に博士の学位 (Ph.D.) を獲得している。本書はその博士論文を基にして出版されたものだが、随所にボル氏の研究に対する言及と検討がみられ、本書に対するボル氏の学説の深い影響が窺われる。

一

本書の内容を紹介する前に、恒例に従って、本書の目次を最初に掲げておく。

- 第一章 導論 (Introduction)
- 第二章 南宋・元時代の吉州における聖地の景観 (Sacred Landscape in Southern Song and Yuan Jizhou)
- 第三章 士大夫と地域共同体 (Literati and Community)
- 第四章 南宋・元時代の吉州における地域所属感 (Imagining Local Belonging in Southern Song and Yuan Jizhou)
- 第五章 南宋・元時代の吉州における聖地景観以外の方法による地域所属感 (Other Ways of Being Local in Southern Song and Yuan Jizhou)
- 第六章 明初の吉安地域寺院—中央からの視点 (Local Temples in Early Ming: The Central View)
- 第七章 晩明の吉安—新たな聖地をめぐる景観 (Late Ming Jizhou: A New Sacred Landscape)
- 第八章 晩明の吉安における寺院と士大夫共同体 (Temples

## 第九章 明代吉安における聖地景観以外の方法による地域所属感 (Other Ways of Being Local in Ming Jian)

第一章の「導論」は、最初に、烏斯道という明初に吉安府永新県の知事となった人物をめぐる逸話の紹介から始まる。着任したばかりの烏斯道に、当地の士人は次のような話を語った。南宋末・元初の混乱期に、モンゴル軍の当地への侵入によって一家を皆殺しにされた譚夫人は自分の幼子連れで県の学校に逃げ込むものの、兵士にみづかり、貞操を守ろうとして幼子ともども殺害された。床に流れた血は拭っても拭いても落ちなかった、と。烏斯道は県学の床に残る染みにまつわるこの悲しい物語を聞くと、その受難場所に譚夫人を祭る廟を再建した。さらに息子の烏熙は、譚夫人を記念する琵琶演奏曲を作成する一方、譚夫人とともに殺害された女召使いの亡霊が、琵琶曲を奏でる彼の前に現れて祭祀に対する不満と、譚夫人が生前に郷里への想いを表した二〇ほどの詩を作成したことを語ると、その譚夫人の想いに深く感動を覚えるとともに、二人に対する定期的な祭祀の実施を約束したというのである。ゲリチェン氏は、この逸話を紹介して、そ

こに本書を特色づける全ての要素が含まれているとする。すなわち、この話柄をめぐつて、まず関連する時代が南宋から明代に至る長期間に及ぶこと、次いでこの地域の景観に寺・観・廟が含まれ、その景観を記す士人が存在していたことなどである。そして、吉州(吉安)の景観に含まれる寺・観・廟をめぐる士人の記述が、宋・元・明を通じてどのように変化していったのが、本書の主題だと述べるのである。これに続いて、以下、本書が取り上げる士人・士大夫のアイデンティティ、取り上げる寺・観・廟の碑文と時期、地域社会の問題、本書でいう景観の定義(この定義は後述)、依拠する史料・資料の種類と性格などをそれぞれに関する項目を立てて簡単に言及している。

第二章は、最初に江西の自然環境を述べ、次いで宋から明に至る江西地域について、産業を中心にした状況が概言される。そして、次のように本章を結論づける。すなわち、宋元時代の吉州の景観に関する記述は、自然と戦い、自然を飼い慣らしてきた過程を如実に示すものであり、寺・観・廟をめぐる碑文は、そうした自然の脅威との戦いと交渉の記録として読むべきものである、と。

第三章は、南宋・元時代における士人・士大夫と地域社会

との関係を論じている。この時期、士大夫たちは寺・観・廟を地域社会を形作る主要な場所であり、地域社会の統合性を象徴するものだと見ており、そのことは、宗教施設に対する士大夫たちの記述が、書院などの教育施設や親族・宗族に対する記述よりも多いことによつて示されるという。

第四章は、寺・観・廟に対する南宋・元朝時代の、士人の手になる碑文を分析の対象として、次のように論じる。それらの碑文には、作者の何らかの個人的心情や信念が含まれており、そこに士人の作り出そうとする世界観が照らし出されている。士人たちは地方エリートであれ、全国的広がりをもつたエリートであれ、寺・観・廟で行われる宗教的活動に参加することを通じて、自己の郷里に対する所属感だけではなく積極的な参加者であることを示そうとした。言い換えると、宗教活動を通じて統一されている地域社会に、士人は重要な役割を果たそうとしていたのである。士人が地域の寺・観・廟の宗教的活動に参加するのは、個人的な宗教意識を満足させるのとともに、その参加によつて地域社会における彼らの威信を高めようとする側面を併せもっていた。しかし、士人の宗教活動への参加は、宗教への無批判に基づくものではなく、地域社会の構成員として、すなわち内部の人間として、

宗教実践に対して、彼らなりの理想像（理念像）をもつて対峙しようとしていた、と。

第五章は、南宋・元代の士人が寺・観・廟以外で、地域社会に意味を賦与しようとしたもの、つまり族譜・州学・県学・書院に対する序文を分析の対象としている。その結果、次のように結論づける。書院はその存在する地域において意味をもつというよりは、帝国規模という広がりの中に位置づけられる。それに比較すると、寺・観・廟の碑文は、まさに吉州出身の士人・士大夫が自己の地域におけるアイデンティティを確認する手段としての役割を担っていた。州学・県学や族譜に対する序文にも、郷土意識は垣間見られるが、やはり寺・観・廟の碑文こそが士人の郷土所属観念をより鮮明にみせる媒体であった、と。

第六章は、明初の士人の、吉安に対する眼差しの変化について論じている。著者によると、元末の混乱期に吉州（吉安）の寺・観・廟は破壊され、明初にそれらは再建されたが、その再建は太祖（朱元璋）によつて定められた祀典に沿うように意識された。一方、明初、吉安出身の進士は異常なほど多く輩出され、その数は建国当初から一四九四年に至るまでの間に四四九名に上り、それは同時期の福州の二四八名、蘇州

の一四六名の合格者と比べて突出していた。しかも、吉安出身の合格者たちは、楊士奇・解縉・梁潛・王直・胡広らのように洪武・建文時期に中央で重く用いられていた。こうした中央で活躍する士大夫たちは、地元の求めに応じて、自分が訪れたこともない寺・観・廟の碑文を作成したが、彼らは中央の視点から地域の宗教活動を眺めようとし、それ故に地域を越えた聴衆に語りかけようとしていた。そして、地域社会の宗教活動や信仰に対しても、南宋・元代の士人とは異なった姿勢を示した。南宋時期、たとえば歐陽守道はこの地域の宗教活動に批判的であったが、それでもそうした宗教活動に對して、あるべき姿に変えようと熱心に取り組んだ。しかし、明初になると、梁潛に典型的に見られるように、地域の宗教活動や信仰は笑うべき対象であっても、そうした活動や実践を変化させようとするには関心を持たなかった。他方、地域社会の人びとにとっても、中央で活躍する士人との繋がりや地域の宗教施設が中央から見て何らかの意味をもつていると認定されることが重要視された。

第七章は、明代になって変化した吉安の景観に対する士人や士大夫たちの眼差しを問題として取り上げている。著者は次のように論じる。一三世紀の江西は辺境地域 (terra

cognita) に過ぎなかったが、一七世紀の江西は、中国北部や江南各地に食糧を提供する場所として有名であり、饒州景德鎮は陶業で名高かった。他方、明代の後期、賦役と租税負担の増加は、江西地域の農民を没落させ、湖広に新天地を求めたり、商人になったり、地主の佃戸となったりするものも多く出現させた。かくして、江西において大莊園が発達し、商業活動が盛んになり、佃戸が増加したことは、江西の景観を変化させた。こうした景観に対する眼差しの変化を、本章は、主に徐霞客の目を通して示している。一七世紀に吉安を旅した徐霞客は、寺・観・廟が存在している自然それ自体に對する特別の関心を寄せていたが、宋元時期の士人と異なつて、寺・観・廟に関する興味は窺えない。要するに、宋代の吉州も明代後半の吉安も寺・観・廟を含む聖なる場所としての風景は同じであったが、宋代においては恐れを抱かせる場所が明代になると親しみのある、単なる自然環境となったというのである。

第八章は、明代中期・晩期になって、寺・観・廟に関わる宗教儀礼に対する士人の興味や志向性に大きな変化があったことを論じている。明代中期以後になると、吉安の科挙合格者は明初に比べて著しく減少し、しかも科挙に合格しても出

世する人物も少なくなつた。そのため、明初と比べて郷里に居住する士人が多くなつたが（その点では宋元の士人と同様な境遇にあつた）、彼らの書き記す寺・観・廟の碑文は宋元時代の士人と比較すると醒めた眼差しを特色としていた。それは明初の先駆者が都という遠い場所から描くというような物理的距離ではなく、郷里に居ながらも精神的にその特定の地域と距離を置こうとする意識によつてもたらされたものである。すなわち、宋元時代と同じく、晩明になつても、吉安の寺・観・廟を含む聖地は相変わらず記述され続けたが、ここでは宋元時代、地域における宗教的实践や儀礼遂行を記述したのとは異なつて、宗教にまつわる哲学的・文学的話柄を中立的な觀察者の立場で取り上げ、それらの話柄とは距離を置くような書き方となつていつた。そこからは、宋元時代において宗教的实践に関わつて、寺・観・廟を地域活動の中心として位置づけようとしてきた志向性とは異なつて、晩明の士人は寺・観・廟を地域活動の核とすることに興味を失つてしまつた姿が浮かび上がってくる。

第九章は、明代中晩期、寺・観・廟の碑文に代わつて、地域社会の意識を高める役割を果たした他の団体や施設に言及している。最初に、この時期に活動が目立つてくる宗族を祖

上に載せている。著者は次のように論じる。一四世紀末以降、吉安からは中央で活躍する士人をあまり輩出しなくなり、たとえ科挙に合格しても地位の低い地方の官職に甘んじたり郷里に居続ける士人が多くなつた。郷里に居る士人は、地域におけるエリートとしての地位を確保する戦略の一つとして宗族を形成することを行つた。宗族は、地域社会の秩序形成の出発点として重要な意義を担つており、したがつて宗族活動を具体的に示す族譜の、その序文を書くことは、そうした社会秩序安定の一助を担うことだと考えられていた。しかし、宋元時期の寺・観・廟の碑文の著者たちが共同体内部の間であるのに反して、この時期の族譜の序文は、宗族の外部の有名士人によつて作成された。共同体内部から共同体を変えようとする志向性は稀薄だつたといえよう、と。次に書院・州県学・郷約を順に取り上げている。白鷺洲書院に関する碑文に端的に窺われるように、書院は吉安の地域観念を高める役割を担つており、その建設に士人たちは喜んで参加した。また、県学・州学などの学校は、書物を基礎とする学問を行つたり、科挙受験を準備するための場所として機能しただけでなく、何よりも地域社会の道徳情況に改善をもたらす場所として地域に大きな意味をもつていた。さらに、地域社会を再

建し維持する手段として、一五世紀末には郷約が発達した。贛州の知事として赴任した王陽明は、一五一八年、盜賊の横行に対処するために郷約を実施したが、彼が離任した後も、聶豹・鄒守益・羅洪先といった彼の弟子たちが、その事業を引き継ぎ、郷約を維持しようとした。士人は郷約を通じて郷里共同体を一体のものとしようとして積極的に地域の活動に参加していったのである。

第九章は、最後に三頁余りの「エピローグ」を付けている。この「エピローグ」は第九章にとどまらず、本書全体の「結び」となっている。著者は次のような議論を展開して本書を締めくくっている。すなわち、ポール・スミス(Paul Smith)は「宋元明移行期」という文章で、一一〇〇年から一五〇〇年の間の主要な政治問題は、漢族と非漢族との関係のバランス、国家と社会・経済・文化のいずれの分野にも優位に立つエリート層(socio-economic and cultural elite)との関係の変化、社会の変化の三点であると述べているが、本書は、この中で第二の、社会経済的にも文化的にも優位にあるエリート層と国家との関係を主に取り上げ、その問題を士人の著作を通じて考察してきた。考察の結果、明初の間だけ、国家が吉安の士人の関心の中心であり、アイデンティティの中核をなした

が、そうした期間は短く、より長い時期は、中央よりも地域社会が共同観念・アイデンティティの拠り所となっていた。言い換えると、南宋時代に始まる地方化は元明時期も継続しており、明初は一時的に中央化が見られるものの、明代後半期に及んで地方化して清初に至るのである。そして、宋元時代、寺・観・廟は地域の共同性を積極的に訴える場所であったが、明初では同じ場所が国家への忠誠を示す施設として機能し、晩明になると、地域の共同観念を示すものは、寺・観・廟から書院・族譜の序文・郷約へと変化していった。本書は、吉安という一地域を取り上げて、南宋以来、一貫して地方化の流れがあり、明初は一時的な逸脱(aberration)に過ぎないことを示したものだということである。

## 二一

以上の拙い紹介からも、本書の創見に満ちた内容や見解が窺われると思われる。本書の検討を進める意味からも、繰り返しになるが、まず本書の特色を確認しておく。本書の特色は二つに分けられよう。それは、士人・士大夫の地域社会に対する所属意識・アイデンティティと関わって景観

(landscape) に着目したこと、考察の時間的範囲が南宋から明末までの長期間に及ぶことである。ちなみに、本書のキーワードとなっている「景観」に関して、著者の説明は些か抽象的で分かりにくいのが、評者の理解によれば次のようである。本書で言う「景観」とは、眼前にあつて実際に経験できる現実としての景観それ自体ではなく、それを記述する士人が、当地の住民として抱く理念像としての景観に近づけてゆく過程 (Process) だといふのである。それ故に、「景観」は、士人の地域に対するアイデンティティと深く結びつき、しかもこのアイデンティティも静的なものではなく、時代に從つて変化してゆくものだといふのである (一三・一四頁)。

本書の特色の中、最初の景観への着目とは、吉州 (吉安) に存在する寺・観・廟の碑文を主な分析の対象として、その中に宋元時代においては自然の脅威との戦いと交渉が如実に示されていると述べる一方で、士人・士大夫の、寺・観・廟の宗教的儀礼と実践に対する参加や批判を通じて、自己の郷里に対する所属意識を表明していると断じている点を指している。そして、明代も後半時期になると、かつての脅威として感じられた自然は、親しみがあがり、歴史的重みを重ねてきた名所として考えられるようになり、郷里に対する士人・士

大夫の意識は明初において一時は中央から眺められる遠い存在であったのが、明代中期以後になると、学校・宗族・郷約などを通じて再び強化されていったといふのである。

こうした寺・観・廟の碑文の内容分析を通して、人びとの自然観や士人・士大夫のアイデンティティを把握しようとする視角は著者独特のものであり、新鮮な読後感を私は抱いた。とはいえ、自然観の変遷に対する全体として魅力的なこの記述も、子細にみると、時として論理の飛躍も見られ、疑問の余地が無いではない。たとえば、明代に起こった自然観の変化を記した第七章の序説 (一五五・一五六頁) と結論部分の最後である (一七五頁)。ここでは、明代の吉安の自然は、宋元時代と異なつて恐れを抱かせるものではなく、親しみのある場所として士人の日常生活の一部となつたと論じている。そして、そうした変化を生じた原因を、明代江西あるいは吉安地域における商業や手工業の発達、それに佃戸制に伴う大土地所有制といった社会経済的变化に求めている。しかしながら、そうした社会経済的变化が、どうして、いかにしてそのような自然観の変化に結びついてゆくのかといった論理が用意されていないと思われる。本章の関連する部分を讀んでも、少なくとも私は、こうした疑問が氷解することは

なく、論理の飛躍に戸惑いを覚えたままに終始した。

また、安福県の蟠籐廟に関する南宋の王庭珪（ゲリチェン氏は、六七頁では王庭圭と記し、二四三頁の参照書目[Bibliography]では王庭桂に作る。むろん、王庭珪が正しい）の言辭をめぐる指摘にも論理の飛躍が見られよう。王庭珪が、この廟の神が国家の認知を得ていようと得てまいと、その神力には全く関わりなく、それは恰も人間の価値を議論するとき、当人の官職の有無とは関わらないことと同じだと主張している点を捉えて、ゲリチェン氏は次のような推測を述べる。すなわち、王庭珪の、科擧に合格したけれども、同郷の胡銓が金との和議に反対して左遷されたとき、その意見に同調したために長年にわたって郷里に蟄居して著述生活を行った軌跡を紹介して、その上で、蟠籐廟に祭られる神が国家の認定を受けていないことに關するこの言辭には、自分が不遇であったことが明らかに反映されていると指摘する（七八頁）<sup>⑥</sup>。ゲリチェン氏のこの推測は、私も可能性としては充分にありえると思うのだが、「明らかに（clearly）」と言ってしまうと、論理の唐突さや飛躍を感じるのである。

次に、本書のもう一つの特色である時間的範囲に目を向けよう。著者は、吉州（吉安）という一地域の觀察を基にしな

がら、南宋以来、元明を通じて中国社会は主に地方化の流れにあると主張する。そして、南宋元から明に至る時期は、唐宋変革と晩明以降に起こる急速な変化という二つの大變革期に挟まれているが、そのことは逆に言うと、二つの大變革期を橋渡しするという重要な役割を担った有意義な時期、だといふのである。しかも、著者はこの時期自体の意義に関する注意を喚起することも忘れていない。つまり、この時期を全体として変化の無い持続性の勝った時代だと捉えると、地方レベルで起こった重要な変化を見逃してしまうのだといふのである（八頁）。そして、その変化を著者は、士人・士大夫の郷里共同体に対するアイデンティティを手掛かりに考察を進め、南宋に始まる地方化の意識は元明にも継統するが、明初に一時的に中央に向かいながらも、明代後半期には再び地方化へと士人の意識が変化していったと指摘する（二二八頁）。そこには、ジョン・ダーデス（John Dardess）氏の、明代の吉安府泰和県の士人・士大夫の動向を事例に、明初に泰和出身で中央で活躍した多くの士人・士大夫は強い同郷意識によって支えられ強固な繋がりを中央でもつていたが、その同郷意識も明代中期以降なると次第に衰退していったという見解に対する強い異議の申し立てが表明されている

(二一七・二二八頁)<sup>7</sup>。要するに、明初の中央への志向という現象は、ピーター・ボル氏の指摘するように、南宋から明末に至る地方化という大きな流れの中における逸脱に過ぎないというのである(二二八頁)。ちなみに、本書は、ダーデス氏の見解を取り上げながら、それに対して自己の見解を対峙するという叙述形態を取る箇所がかなり多く見られ(本書の索引を見ると、泰和をめぐる同氏の見解への言及は一二回にも及ぶ)、それだけにダーデス氏の所説は多く引用され、自説を際立たせる効果的な役割を演じさせられている。

このような特色を有する本書は、極めて魅力に富み、一読に値する優れた研究書として推挙することに異論はない。したがって、どんな優れた作品にも見られる些細な間違いは、当然に論旨に大きく関わらない限りは大目に見てしかるべきものであろう。たとえば、歐陽脩が郷里を訪れたのは一度だけとしている点である(一〇一頁)。これは劉子健氏の指摘に依拠し、採用したにすぎないのだが<sup>8</sup>、実は、歐陽脩は、母親の鄭氏と早世した彼の二夫人を埋葬するために皇祐五年(一〇五二)に訪れたこと以外にも、大中祥符四年(一〇一二)に父親の歐陽観を郷里に埋葬したときにも訪れた可能性は充分にある<sup>9</sup>。また、劉辰翁『須溪集』卷三「朝仙觀記」を引用

して、その文中の「顔魯公」を孔子の弟子の顔回としているが(八六頁)、無論、顔魯公は顔回ではなく、安史の乱に抵抗運動を組織し、書家としても有名な顔真卿を指しているよう。とはいふものの、些細なミスも度重なりと問題を生じるであろうし、その上、論旨と関わる場合は尚更であろう。とりわけ、評者が読んでいて気になったのは、掲げられた史料の誤読と、誤読に基づく自身の見解の敷衍がしばしば見られる点である。少し例示しよう。

著者は、既述のように、寺・観・廟とそれをめぐる自然景觀の問題をしばしば取り上げている。明代においても、吉安府内を流れる川沿いに安全航行を祈るための廟(shrine)が多く存在していたと指摘し、そうした事例を『万曆吉安府志』から幾つかを紹介している(一七三・一七四頁)。しかし、「南平王廟」に関する著者の史料解釈は肝心なところに誤りがある。行論の都合上から、まず原史料を掲げよう。原史料の「南平王廟」の項には、「在儒林郷西坑、神為唐南平王、逸其名、王没、百姓思遺德、立祠祀之(儒林郷の西坑に在る。神は唐の南平王為りて、其の名を逸す。王没し、百姓は遺德を思い、祠を立てて之を祀る)」とある。これが関係する史料の全文であるが、ゲリチェン氏はその中の、「逸其名、王没」を「人

びとは彼の名前を忌み避けた。ここで溺れ死んだ人が、この神なのだ (One avoids his name. This deity drowned here)』と解釈し、この解釈を受けて、更に引用文の直ぐ後に「溺死という不条理な暴力が (その神に) 非常に多大な力をもたらした (The violence of death by drowning covered extreme numinous powers)』と敷衍している (一七四頁)。すなわち、溺死という不条理な死を遂げた南平王を祭ったのが、この廟であると解釈しているのである。こうした解釈は、宋元時代、当地の廟に祭られる神の多くが非業の最期を遂げた人であるという著者の見解の延長線上にある (こうした見解は、とくに第二章で展開されている)。だが、史料を素直に読めば、問題の部分は、「(ここにいう南平王) の名前は現在では分からなくなっている。彼が死ぬと、(人びとは南平王の遺徳を偲んで祠を作り、彼を祭祀した)」と解釈すべきものであって、そこに何ら神秘的な話の介在する余地は存在しない。

ところで、こうした自然を脅威と感ずる人びとの心性は、著者によると、宋元時代に突出しているのだが、その「ことに主に言及する第二章は王象之『輿地紀勝』や洪邁『夷堅志』などからその例証を多く挙げている。その中で、『夷堅三志』』卷七の「吉州樟木」(著者も引用する一九八一年、中華書局

本では、第三冊目の一三五八頁) と題する吉州の軍資庫の側に生えている樟の大木にまつわる話を紹介している (三三三頁)。この話の大筋はこうである。乾道二年 (一一六六) 六月の大嵐で一枝が折れてしまったが、嵐が去った後も奇怪な現象を起こすために、知事の命令でこの樟の大木は切り倒された。それをめぐって、ある人は、この現象を、吉州の西北に隣接する袁州宜春県の大族の没落を象徴するものだと言っていた、と。問題となる箇所は、その「或云 (或るひと云う)」に続く、恐らく洪邁自身のコメントの部分である。原文は「然則此木遭厄、固有定数、亦云異矣 (然らば則ち此の木は厄に遭うは、固より定数有ればなり、亦、異と云えり)」である。著者は、そこを「もし、この現象が或る人の言うとおりに解釈できるならば、この木は事前に定められた寿命ゆえに終わりを迎えた。しかし、ある人間は、別な解釈をしている (If this is so, then this tree came to its end because it had a predetermined lifespan [that came to its end]. . . Some, however, have different explanations)」と翻訳し、この翻訳に示される解釈に基づいて次のページで「この木が倒れたのは、前もって決められた寿命が終わったと見なされていた。だが、終わりの一節に述べるように、別の解釈もあつ

たのであり、単一の見方だけが広く受け入れられていたわけである。(The felling of the tree might well be seen as the end of its predetermined explanations and no single view is universally accepted)」と言い換えている(三四頁)。しかし、この「吉州樟木」の一番最後の「亦云異矣」は、「この木が、こうした災厄に遭遇したのは、この木に事前に定まった寿命があったからであるが、それも)また(人知で推し量れない)変わった現象といえよう」と解釈すべき箇所なのであって、決して「別の解釈があった」とは読めないのである。

以上の二例は、史料の訳文の文脈に疑問をもった評者が、偶然、著者の引用する史料を手近に持つていて、その原文に当ることができたから気づいたのである。原文に当たることができなかつたが、他にも引用文章の文脈からして誤訳ではないかと疑われる箇所も見受けられた。とまれ、他山の石として、私自身もそうだが、史料の解釈には細心の注意を払う必要があるといえよう。

最後に評者が本書を読んでいて気になったのは、地名・人名・書名などの漢字表記を付ける規準がよく分からなかつた点である。言うまでもなく、あまりに有名な、あるいは頻出する事項を引用するとき、一々、漢字の表記を示す必要はな

いかも知れない。その場合でも、読者の便宜を考えると、無論、初出の事項の漢字表記は望ましいと思われる。それにもまして、とくに手近に参照できない史料の引用や、他の分野の中国史研究者には余り馴染みのない事項においては、こうした地名・人名・書名などは漢字表記を示してくれた方が読者にとって有益なことは言を俟たないだろう。たとえば、一七四頁において、『万曆吉安府志』巻一六に載る廟神を紹介するが、その神の一つを「xiao」という名字だけで知られる(known only the surname)」と記すが、手元にその史料が無いがぎり、その「xiao」が「蕭」だとは予想はできても正確には見当が付かない。「xiao」だけならば、「蕭」の他に「蕭」の俗字名として使用される「肖」も名字として思い浮かぶからである。また、一九六頁の後半部分には、『同治廬陵県志』が引用されているが、引用文中の斜体文字となっている原語の多くは、原文を見ない限り、正確な漢字を推測することが困難だと思われる。そして、いずれにせよ、誰しも『万曆吉安府志』や『同治廬陵県志』が中国史研究者の全てにとって必携の図書だとは思わないだろう。

本節の最初近くでも述べたように、本書は、知的好奇心を

満足するに足る創見に満ちた書物といえる。それだけに拙評は揚げ足取りに終始したかに見えるかも知れない。著者の御寛容を願う次第である。また、本書に関しては、故岡元司氏が、絶筆として *Journal of Song-Yuan Studies*, vol.39 (2009) に紹介文を書いている。しかし、氏と私とは論点に異なる点も多く、敢えてこの拙い紹介文を残し、併せて夭折された岡氏の御冥福を祈りたい。

註

- (1) G.William Skinner: "Regional Urbanization in Nineteenth-Century China," ed.G.William Skinner. *The City in Late Imperial China*, Stanford U.P.1977. なお、スキナーのこの論文は、今井清一氏によって翻訳されている(『中国王朝末期の都市―都市と地方組織の階層 構造―』晃陽書房、一九八九年)。
- (2) 許遜をめぐる説話の歴史的展開については、本書も引用する。秋月観映『中国近世道教の形成』(創文社、一九七八年)に詳しい。
- (3) いわゆる江右学派に関しては、宗族との関係も考慮に入れた張藝曦『社群・家族と王学的郷里実践―以明中晚期江西吉水・安福兩県為例―』(国立台湾大学文史叢刊之二二九、台湾大学文学院、二〇〇六年)を挙げておく。
- (4) こうした指摘は、多くの研究者によってなされているが、ここでは差し当たり、瀬川昌久『中国社会の人類学―親族・家族からの展望―』(世界思想社、二〇〇四年)「第四章 宗族発展のサイクルと地域性」を挙げておく。
- (5) 『(5)』『Problematising the Song-Yuan-Ming "Transition"』と題する文章は、ホール・スミスとリチャード・フォン・クラム(Richard von Glahn)の編修による『The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History』(Harvard U.P.2003)の「導論(Introduction)」である。なお、この書物の詳細な紹介と批評は、中島楽章氏が行っている(『中国―社会と文化―』二〇号、二〇〇五年)。この中島氏の文章は、中国語に翻訳されているので、中国人研究者にも参照可能である(日本中国史研究年刊行会編『日本中国史研究年刊(二〇〇六年度)』上海古籍出版社、二〇〇八年)。
- (6) 胡銓の金との和議反対の議論、その胡銓を擁護して不遇な境遇となった王庭珪に関しては、私は「宋代吉州の胡氏一族に

ついで「胡銓を中心にして」(『名古屋大学東洋史研究報告』三四、二〇一〇年)に言及しておいた。

(7) ここにいうターデス氏の見解とは、氏の *A Ming Society: Tai-ho county, Kiangsi, in Fourteenth to Seventeenth Centuries* (California U.P., 1996) に表明されたものに基いていふ。

(8) ケリチェン氏の記述は、*Sung Biographies* (ed. Herbert Franke, Wiesbaden, Steiner, 1976) に載る劉子健 (James T. C. Liu) の手になる伝記に基づいている(八〇九頁)。ついでながら、ケリチェン氏は劉子健の記述に基づいて歐陽脩の郷里を「廬陵」としている。確かに、本書も触れているように(一一六頁)、宋元時代、吉州のどの県出身であっても吉州の治所のある廬陵県を出身地と書く例が多く、そのような意味では問題はないが、正確には祖父の歐陽偃以来居住した沙溪鎮は、至和二年(一〇五五)以前は吉州吉水県に属し、それ以後は永豊県に属しており(拙著『歐陽脩 その生涯と宗族』(創文社、二〇〇〇年)二九五頁)、いずれにせよ廬陵県ではない。

(9) 前掲拙著二九八頁参照。

(10) 「岡元司先生を偲んで」(『広島東洋史学報』一四、二〇〇九年一二月)に、書評の予告が出ており、実際この文章は二〇一〇年に入手した当該雑誌の二五二―二五七頁に載っている。

Leiden, Nederlands Koninklijke Brill NV, 2007, 258pp.  
(1) ちぎし よしひさ 東海大学文学部教授